

ヴィクトリアニズムとジョージ・エリオット

堀出 稔

Victorianism and George Eliot

Minoru HORIDE

ジョージ・エリオットの生涯は、ほぼヴィクトリア女王の在位期間にあたり、19世紀イギリスの社会風潮の中で、人間の在り方、特に女性の自立に深い関心を示し、それを世に問うていった女性の歩みであった。当時のイギリス社会は、重大な外的脅威もなく、産業革命以後、ヨーロッパの工場と言われる程経済の発展は著しく、国民はきまじめで生活力に溢れていた。1938年には、成人男子普通選挙などを要求する「人民憲章」が労働者達によって刊公された。このような人間の権利に対する自覚は、当時の女性達の中にも育まれ、それは18世紀後半から続いていた。その視点から見れば、ジョージ・エリオットは、イギリスフェミニズム思想を体系化したメアリー・ウルストンクラフトの理論を実践した人物の一人と言っても過言ではない。この小論においては、当時のイギリスの社会風潮であるヴィクトリアニズム、そしてその風潮の一部である女性に対する厳しい道徳律に反抗したジョージ・エリオットの生涯と作品を振り返り、彼女の一思想を考察してみたい。分析の順は、イギリス19世紀のヴィクトリアニズム、ジョージ・エリオットの生涯そして彼女の小説についてである。

ヴィクトリアニズムとは、ヴィクトリア女王在位期間(1838-1901)のイギリス国民の生き方あるいは人生観を要約して述べた言葉¹⁾である。デイヴィッド・セシルなどによるヴィクトリア朝の再評価以前は、妥協的で偽善的な時代として罵倒されてはいたが、近年ようやくその評価は高まった。即ち、人々は清教徒的倫理観に基き日々の労働に励み、社会の道徳律を遵守し、イギリスの繁栄を築いた。時代を辿ってみると、19世紀初期には産業革命によって小企模経営の農民は土地を追われ、熟練労働者はその意義を失い、多くの工場で働く労働者が出現し、婦女子もその労働に従事するというように社会の変革が進んでいった。国外においてはナポレオン戦争があり、イギリスにとっては動揺する時代であった。しかし中期に入ると国の内外の動揺も収まり、建設と繁栄の時代に入る。イギリスの歴史家G・M・ヤングによると、
The first Victorian generation had built with the sword in one hand and the trowel in the other : in the fifties the sword was laid aside and the trowel was wielded, quietly, unobtrusively, anonymously, by civil servants and journalists, engineers and doctors, the secretaries of Trade Unions and the aldermen of manufacturing towns.²⁾

ヴィクトリア朝初期の世代では、片手に剣、もう一方の手には鍬をもって国の建設にあたり、中期には剣は脇に置かれ、鍬が官吏、ジャーナリスト、医者、労働組合幹部、工業地帯の議員などによって静かに慎み深く、黙々と使われたと述べている。このように国民の建設的意志に基いて社会の繁栄が築かれていた時、最も社会から取り残され、因習と偏見に縛られ従属的な

存在にさせられていたのは、当時のイギリス女性達であった。特に産業革命以後増加していた中産階級に属する女性達は、嗜の良さを身につけたか弱い存在こそ理想と考えられ、女性の自立などとうてい認められなかった。既婚婦人は財産権はなく、法的にも人権は十分に保証されていたとは言えなかった。未婚女性が仕事に就くと言え、たいてい住み込みの家庭教師の職であり、他の多くの職は阻まれていた。このようにヴィクトリア朝社会の倫理観は、一方においてはイギリス繁栄の基礎となりつつ、他方において厳しい道德律のため女性の自立を阻んでいた。しかし女性の自我の確立は、精神的には19世紀の初頭から始まっていた。それは最初中産階級の快適な応接間での女性達のサロン風の集りからであり、文筆に励んだ彼女らの書きしるした言葉からであった。

In making up the account of English morals in the nineteenth century it is necessary to bear in mind that the most influential women were reared in an atmosphere which made them instinctively Custodians of the Standard. The two who had most aptitude and most capacity for rebellion were fanatics, Charlotte Brontë for the moral, Harriet Martineau for the economic law. Mary Wollstonecraft had, unhappily, no equal successor, and George Sand could never have grown in English soil. Thus it came about that the pagan ethic which, in the decline of Christian beliefs and sanctions, carried into the next, the agnostic, age the evangelical canons of duty and renunciation, was a woman's ethic. George Eliot's rank in literature has, perhaps, not yet been determined: in the history of ideas her place is fixed. She is the moralist of the Victorian revolution.³⁾

当時の因習と偏見を打ち破って現われた女性達は、シャーロット・ブロンテ及びハリエット・マティーンノなどであった。18世紀後半の女性解放論者メアリー・ウルストンクラフトの女性の自立をめざす流れは、奔流となってジョージ・エリオットに到っているのがであった。G・M・ヤングは、彼女を 'the moralist of the Victorian revolution' と呼んでいる。即ち、ジョージ・エリオットを始め女性の自立の動きは、義務と自己抑制といった福音主義的な倫理を通して、女性の訴えや願いを実現していく源動力となった。

Often obscured by agitation for subordinate ends — the right to vote, to graduate, to dispose of her own property after marriage — the fundamental issue of feminism was growing clearer all through the century, as women, no longer isolated heroines but individuals bent on a career, drew out into the sexless sphere of disinterested intelligence, and Mary Wollstonecraft's conception of autonomous personality took body; a process which may be truly named Victorian if only for the horror with which Victoria regarded it. 'I want', said Bella Rokesmith to her husband, 'to be something so much worthier than the doll in the doll's house.' In the profusion of Dickens, the phrase might pass unnoticed. Twelve years later Ibsen made it the watchword of a revolution.⁴⁾

1850年以後の女性達の様々な種類の権利要求の運動によって、かすんでしまったフェミニズムの基本的課題が19世紀も後半になるに従い、明確になってきた。女性はもはや孤独な女主人公ではなく、男女の別のない世界に歩み出た存在になっていった。ディケンズの小説に登場するベラ・ロックスマスの言葉は、イブセンの『人形の家』を創作するきっかけになったと思われる。ヴィクトリアニズムは当時イギリスのあらゆる階層に浸透し、深く根をおろしていた。にもかかわらず、フランス革命の影響及び産業革命による多数の中産階級と労働者の出現は、人々の心に自由で平等な精神をもたらし、人間の自我の高揚を促すことになった。この精神が

19世紀イギリスの精神的基盤となっていたヴィクトリアニズムを根底から崩していき、20世紀の到来を待つことになるのであった。

それではヴィクトリア時代という時代精神に、一女流作家であったジョージ・エリオットがどのように立ち向ったのであろうか。彼女の伝記的事実から時代精神への反逆について述べる。ジョージ・エリオットは本名メアリ・アン・エヴァンズといい、1819年ノッティンガムに近いウォリックシャー州チルバース・コットン教区のアーバリの大工ロバート・エヴァンズの三女として生れた。母はロバートの2番目の妻であり、先妻の子供達と共に養育された。彼女は幼い頃から多感で愛情豊かな子供であり、秀れた知性を備え読書好きであった。30代頃までの注目すべき伝記的事実を掲げると、9才で転校した学校の校長マリア・ルイスのキリスト教福音主義に基く教育に深い感化を受けている。17才以後には、様々な分野の読書とイタリア語を始め、ドイツ、フランス、ラテン語といった言語を学んだ。22才には教会に行くことを拒否し、プロテスタント系の父と相争った。その時彼女は福音主義のキリスト教信仰の立場を取った。

George Eliot responded to these manifestations of masculine oppression with exceptional defiance. She challenged her strong-willed father's patriarchal authority on the question of religion at the age of twenty-two; consistently refused, when living near Coventry, to follow the majority of her peers in their hunt for 'the one thing needful — i.e. a husband and a settlement'; resided, unmarried and unchaperoned, in Geneva for eight months between 1849 and 1850; supported herself — as few other women had done — as a journalist in London for five years; and, most dramatically of all, perhaps, broke the strict marriage taboo and accepted social 'excommunication' in order that she might live with George Henry Lewes.⁵⁾

エリオットは女性が抑圧状態におかれていることに異常なほどの反抗心を現わした。教会へ行くことを拒否したことは、父親の厳格な家父長的な権威への挑戦であり、1849年から8ヶ月間一人でジュネーブで生活した。しかもその頃彼女の女友達がたいてい結婚とその安住の地を憧れていたにもかかわらず、そのことには興味を示さなかった。さらに当時の女性がほとんど就くことのなかったジャーナリストの職を得て、5年間ロンドンで働いたといわれる。31才になったエリオットは、ジョージ・ヘンリ・ルウィーズと同棲生活に入り、教会に無届けの生活ということで社会の厳しい批難を浴びた。教会に行くことの拒否、ルウィーズとの同棲生活という2つのエピソードは、エリオットの青年期の概成の権威や矛盾の多い道德律への反抗であり、言わばヴィクトリアニズムへの最初の反逆であった。彼女は女性達が法の擁護も充分受けることのできない社会情勢を知り、その中で不利な立場にある女性達に手を差し伸べ、フェミニストサークルにも出入りするようになった。

Determined to secure a high degree of personal emancipation, George Eliot was also resolved, in the years immediately preceding the publication of 'Margaret Fuller and Mary Wollstonecraft', to take an active part in the developing middle-class women's movement. In London she associated with activists of every sort: with educational reformers like Anna Swanwick and Julia Smith; with medical campaigners like Florence Nightingale and Elizabeth Blackwell; with the 'Langham Place' feminist circle. She subscribed to the *Englishwoman's Journal* and offered professional advice to its editors, kept herself well-informed on current feminist issues such as Mrs Norton's campaign against the divorce laws in 1853 and Charles Bray's enquiry into the industrial employment of women, attended lectures at Bedford College in 1851, and signed Barbara Leigh Smith's petition which demanded that 'married women may have a legal right to their

own earnings, as a counteractive to wife-beating and other evils'.⁶⁾

『マーガレット・フラーとメアリ・ウルストンクラフト』という論文を世に出すことによって、当時のイギリス国民に向けて2人の女性解放の思想家を讃えると共に、発展著しい中産階級の女性の社会運動に参加していった。そしてその運動への参加はあらゆる分野に及んだ。例えば、アンナ・スワンウィックなどが推進する教育改革、フローレンス・ナイティンゲールなどの医学分野での運動、女性専門雑誌*イングリッシュ・ウーマンズ・ジャーナル*への編集に対する助言などである。また1853年当時生じたキャロライン・ノートン夫人の事件、女性の雇用に関する問題にも熱心であった。さらに結婚した女性が報酬を得る法的権利を主張したバーバラ・レイ・スミスの請願書にも署名した。『マーガレット・フラーとメアリ・ウルストンクラフト』という論文の発表以後の社会活動は、ヴィクトリアニズムへの彼女の第2の反抗とも受け取ることができる。

It has already been observed that one of George Eliot's aims in 'Margaret Fuller and Mary Wollstonecraft' is to make a personal statement upon the oppression of woman. That this is so can be seen from the way in which, from the third paragraph onwards, she guides the essay into a consideration of specific feminist issues - the case for the extension of vocational and educational opportunity to women, the consequences of men's 'reluctance to encourage self-help and independent resources' in their wives - which she has selected from the two works.⁷⁾

この論文のもう一つの目的は、当時の男性が女性の自立に対して熱意を示さないことへの批判でもあった。ヴィクトリア朝が中期から後期に進むにつれ、社会が安定し、男性は多くの権利を獲得していくことが可能であった。しかし女性の権利獲得の運動はそれほど多くの成果をもたらすわけではなかった。エリオットはそのような現状を打破するため、義務と自己抑制という彼女の倫理観に基いて、当時の社会組織の改革に参加し続けたのであった。

ではそのような社会改革に参加しようとした彼女の倫理観は、作品においてどのように描かれ、読者に何を訴えようとしていたのであろうか。ここでは彼女の初期の作品 *The Mill on the Floss*、中期の作品 *Romola*、後期の作品 *Daniel Deronda* においてヴィクトリアニズムに対する彼女の倫理観について考察してみる。

"Oh, it is difficult - life is very difficult! It seems right to me sometimes that we should follow our strongest feeling; - but then, such feelings continually come across the ties that all our former life has made for us - the ties that have made others dependent on us - and would cut them in two. If life were quite easy and simple, as it might have been in Paradise, and we could always see that one being first towards whom . . . I mean, if life did not make duties for us before love comes, love would be a sign that two people ought to belong to each other. But I see - I feel it is not so now: there are things we must renounce in life; some of us must resign love. Many things are difficult and dark to me; but I see one thing quite clearly - that I must not, cannot, seek my own happiness by sacrificing others. Love is natural; but surely pity and faithfulness and memory are natural too."⁸⁾

これは *The Mill on the Floss* の一文である。女主人公マギー・タリバーが人生のむつかしさを知り、どうしたらよいかと悩む場面である。人生における人間関係の理想について考える。感情に流されそうになる自分を制して、他者との在り方を思い、人間の関りの中心となる絆を愛と考える。その愛故にこそ自己への愛を捨て、他者に尽すところにこそ人間の最も優れた倫理があるとマギーは感じとる。しかし人生は彼女にとって理解しがたいのであるが、ただ一つ

はっきりしていることと前置きしながら、他者を犠牲にして自らの幸福を求めてはいけなさと自らに言い聞かせる。そして愛も生来のものであるがそれと同じく、同情心、信義、追憶も自然の情として受け入れようとする。この小説の結末においてマギーは水死しようとする兄トムを助けようとして、自らも死ぬ。小説の始めから終わりまでマギーの自己犠牲の倫理観が貫かれてきている。フランスの哲学者シモーヌ・ド・ボーボワールは、彼女の著作『第二の性』において次のように述べている。ジョージ・エリオットがマギー・タリバーを、マーガレット・ケネディがテッサを、死なせるのは理由のないことではない。ブロンテ姉妹だって苦しい宿命を経験した。若い娘は感動しやすい。なぜなら非力孤独で世界と対抗しているから。が、世界はあまりにも強力だ。頑固にそれを拒否するなら彼女は自滅する⁹⁾という。エリオットはボーボワールの説の如く、マギーの死を通して読者に社会の巨大な組織と個人の非力とを考えさせ、社会の矛盾が時には正しい倫理を備えた人間をも犠牲にしてしまう時があることを訴えているようである。 *The Mill on the Floss* は作者の幼年期から青年期への成長過程が投影されていると言われる。

In the same way that Wordsworth, in *The Prelude*, announced that 'I was not for that time, nor for that place,' so too the young Mary Ann Evans remembered that:

When I was quite a little child I could not be satisfied with the things around me.

Letters, I 22

Maggie knows that in some other place, or time, she would be in the right:

In books there were people who were always agreeable or tender . . . Who did not show their kindness by finding fault . . . Maggie was a creature full of eager passionate longings for all that was beautiful and glad: thirsty for all knowledge: with an ear straining after dreamy music that died away and would not come near to her: with a blind, unconscious yearning for something that would link together the wonderful impressions of this mysterious life and give her soul a sense of home in it.¹⁰⁾

エリオットは幼年期を回想して、周囲の事に満足できない子供だったと述べている。そして何かに憧れるという姿は、マギーが自分にふさわしい時代や場所を求める姿と二重映しになっている。マギーは知識の飢え、美しい楽しげものを無意識のうちに憧れているのである。彼女が自らに課した倫理としての自己犠牲の精神は、作者エリオットの少女時代の精神そのものなのではなかろうか。 *The Mill on the Floss* はエリオットが30才の頃書かれた作品である。10年を経過した40代の中期の作品 *Romola* には、どのような彼女の想いが込められているのだろうか。エリオットは小説の舞台を15世紀イタリア、フィレンツェに移した。主な登場人物は、フィレンツェの著名な古典学者の娘ロモラ、船の難破の末フィレンツェに来て後にロモラの夫となるティトウ。道徳を説き、社会の理想を実現しようとするドミニコ派僧院長サヴォナロラである。ロモラと結婚したティトウには野心と物欲があることがわかる。ロモラと結婚したのは、高い地位に上る手段であったことがわかってくる。しかし彼女はそれがわかっているにもかかわらず、結婚という社会契約に従う意志は強い。その矛盾を知りながらも、その苦悩を癒してくれる何かを求めようと心を惑わせる。

And the inspiring consciousness breathed into her by Savonarola's influence that her lot was vitally united with the general lot had exalted even the minor details of obligation into religion. She was marching with a great army; she was feeling the stress of a common life. If victims were needed, and it was uncertain on whom the lot might fall, she would stand ready to answer

to her name. She had stood long; she had striven hard to fulfil the bond, but she had seen all the conditions which made the fulfilment possible gradually forsaking her. The one effect of her marriage-tie seemed to be the stifling predominance over her of a nature that she despised. All her efforts at union had only made its impossibility more palpable, and the relation had become for her simply a degrading servitude. The law was sacred. Yes, but rebellion might be sacred too. It flashed upon her mind that the problem before her was essentially the same as that which had lain before Savonarola – the problem where the sacredness of obedience ended, and where the sacredness of rebellion began. To her, as to him, there had come one of those moments in life when the soul must dare to act on its own warrant, not only without external law to appeal to, but in the face of a law which is not unarmed with Divine lightnings – lightnings that may yet fall if the warrant has been false.¹¹⁾

僧院長サヴォナロラの影響により、ロモラは苦悩する心を他者の苦しみを救うという絆に結びつけ、何か世の中の役に立とうとする。結婚によるティトウとの絆は、彼女が最も軽蔑していた野心や物欲を持つ人間への隷従であり、それに対しては反抗も神聖な行為と考える。彼女は法律の神聖さを知りつつ、自らの心に野心や物欲への反抗が神の光を帯びた時、その意志を貫徹しようとする。屈折しながら辿り着いた考えは、世の矛盾に対しては法の神聖さを知りつつも、それに反抗しなければならない時もあるという気持であった。ここにもエリオットの倫理観を想起させるものがあるように思われる。

さて後期の作品 *Daniel Deronda* は50代も後半になって書かれた作品である。ここではデロンダとの出会いを通して、イギリス上流社会の一女性グェンドレンが虚栄と贅沢な心を捨て、苦悩しながら考え深い人間へと成長し、自立していく女性の姿を描いている。この小説の中で、当時の女性が自立することがいかに困難であるかを物語っているように思われる場面がある。

“ I beseech you to tell me what moved you – when you were young. I mean – to take the course you did,” said Deronda, trying by this reference to the past to escape from what to him was the heart-rending piteousness of this mingled suffering and defiance. “ I gather that my grandfather opposed your bent to be an artist. Though my own experience has been quite different, I enter into the painfulness of your struggle. I can imagine the hardship of an enforced renunciation. ”

“ No,” said the Princess, shaking her head, and folding her arms with an air of decision. You are not a woman. You may try – but you can never imagine what it is to have a man’s force of genius in you, and yet to suffer the slavery of being a girl.¹²⁾

デロンダの母レオノーラが久しぶりで息子に再会した時の言葉である。彼はかつて母が芸術家になろうとするのを祖父に阻まれたことを暗示しつつ、彼女がどのような動機で自分の道を選んだかを問うてみた。その時母は、女性という存在が男性と同じ素質を持ちながら、女性であることの屈従に耐えなければならないか男性には想像もつかないことを彼に悟らせた。男性が女性を理解することのむつかしさを、グェンドレンの結婚相手グランドコートを通して描くと共に、デロンダの母の言葉を通して、当時の女性の自立する道の困難さを伺い知ることができるよう思われる。

今までジョージ・エリオットの生涯と作品がイギリス19世紀を風靡したヴィクトリアニズムと彼女がいかに関りを持ち、時には妥協し時には反逆し、それを越えようとしたかを考察してきた。彼女の生涯の注目すべき伝記的事実と作家としての初期、中期、後期の作品からも、彼

女の思想の一貫した流れが理解できる。それは、ヴィクトリアニズムの特に女性に向けられた従来の因習や偏見の含まれた厳しい道德律であろう。これに対して彼女は徹底した返逆で挑み、さらに女性の抑圧された状態に対してはフェミニズム運動に参加し、実践的な反対運動をおこなった。彼女の心情は、基本的には義務と自己抑制といった福音主義的倫理観に従っていたであろう。しかしその倫理観に判う女性の自立についての考えには、現代女性像を示唆しているところがあるように思われる。

Notes

- 1) 平井正穂・海老池俊治、『イギリス文学』（東京：明治書院，1967），p.195.
- 2) G. M. Young, ed., *Early Victorian England 1830–1865* Vol.II (Oxford : Oxford University Press, 1934), p.501.
- 3) Ibid., p. 415.
- 4) Ibid., p. 493.
- 5) Sera Delamont and Lorna Duffin, ed., *The Nineteenth – Century Woman* (London : Croom Helm , 1987), p. 193 .
- 6) Ibid., pp. 193 – 194.
- 7) Ibid., p. 200.
- 8) George Eliot, *The Mill on the Floss* (Boston and New York : Houghton Mufflin Company , 1908) , pp . 276 – 277.
- 9) シモーヌ・ド・ボーボワール著，生島遼一訳，『第二の性』（東京：新潮社，1959），p. 266.
- 10) John Purkis, *A Preface to George Eliot* (London and New York : Longman , 1985), pp . 105 – 106.
- 11) George Eliot, *Romola* Vol. II (Boston and New York : Houghton Mifflin , 1908), p. 265.
- 12) George Eliot, *Daniel Deronde* Vol. I (Boston and New York : Houghton Mifflin Company , 1908), p. 125.